

物質文化よりみたカンボジアのペットボトル考

An Analysis of CAMBODIAN PETbottles for material culture

齊藤 基生

Motonari SAITO

はじめに

筆者は考古学の育ちだが、名古屋学芸大学（以下学芸大と略す）の教養科目「民族と文化」、名古屋外国語大学（以下外大と略す）の共通科目（教養科目）「人類Ⅰ・Ⅱ-1・Ⅱ-2」を担当している。いずれの教科も第一回目の講義では、受講生の出身地や専攻、それぞれの分野に関する予備知識、初回の感想など細々としたアンケートを取る。その中で、「モノを見るとは何か」を説明する手掛かりにするため、今年度（2006）前期は学芸大と外大の学生に、この年の3月遺跡調査に出かけたカンボジアから持ち帰った、それぞれ異なるペットボトルを回して一言答えてもらった。

その結果、両大学の学生の間で、別のペットボトルを回したことも影響しているかもしれないが、見事に異なる反応が得られた。彼らのアンケート結果を中心に、「モノを見るとは何か」物質文化の視点より考えたい。

1 モノをみるということ

「はじめに」でも触れた様に、筆者は学生時代から考古学と深く関わってきた。考古学は、文字のない時代だけを研究対象としていると思われがちだが、最近では文字記録のある時代の考古学も盛んで、文字があっても文字に書き残されない歴史の解明に努めている。文字記録があろうとなかろうと、直接モノに問いかけ、モノの声に耳を傾ける、それこそがまさに考古学を含めた物質文化史研究の基本姿勢である。

考古学者である加藤晋平氏は、その著作の中でモノをみることに関連し、北海道常呂川流域にある吉田遺跡を例に挙げながら、先土器時代における地

域の歴史をどのように復元するか述べている^{註1}。加藤氏は「人間集団の生活を復元する手がかりを得るため」には、状況的属性（発掘調査時における経験から、石器に与えられる属性）と内包的属性（石器自体の持つ属性）という二つの属性を徹底的に明らかにしなければならないとする。

吉田遺跡での具体的観察例として、1点のエンドスクレイパー（おもに、皮を鞣す際に付着した肉や脂肪を掻きおとす道具）を取り上げている。属性分析の詳細は原著に譲るが、内包的属性として、その石器が黒曜石を素材としていること、形や製作技法、法量（長さや重さなどの計測値）、使用痕などの観察が事細かに記されている。次に状況的属性について、遺跡における遺物出土のあり方、他の石器との共伴関係、同じエンドスクレイパーの多さ、かつそのうち4割が黒曜石本来の光沢を失い白っぽく変質していること、などをあげている。白っぽく変質した要因は、その後の実験から黒曜石が6～9時間熱を受けた結果とわかった。

こうした内包的属性と状況的属性から、このエンドスクレイパーは「ここで生活していた人たちは、炬を囲みながら繰り返しエンドスクレイパーを使って作業を行っていた」うちの1本であることを明らかにした。

つまり、モノをみる言うことは、徹底的に内包的属性と状況的属性を分析することにほかならない。具体的には、観察者がモノにどれだけどんな問いかかけをし、モノが持つ情報をいかに引き出すかである。

蛇足ながら、考古資料において内包的属性は、モノが失われぬ限り何度でも観察し直すことができ、観察者それぞれの観察結果が得られる。ところが状況的属性は、発掘現場に立ち会った当事者だけしか観察できない。発掘調査では、その状況的属性を常に改変しながら、遺物や遺構を掘り出している。そこで見逃された状況的属性は、永遠に失われ取り返しがつかない。だからこそ、発掘担当者には高い見識が求められる。状況的属性のわからない考古資料は、学術資料としての価値が半減する。

モノは、正しく問いかければ「はい、そうです」と正しく答え、誤った問いかかけをすればただ沈黙するだけである。例えば、一本の鉛筆に「あなたは鉛筆ですね、芯の色は黒ですね、固さはHBですね、長さは、断面の形状は、軸の素材は、生産者は、使用者は」など正しく問いかければ、すべて正しく答えてくれる。しかし、鉛筆に向かって「あなたはシャープペンシルですか、ボールペンですか、万年筆ですか」など問いかけても何も答えてくれない。

モノから引き出される情報の質と量は、ひとえに質問者（観察者）の問いかかけの能力に関わってくる。モノは質問者により、饒舌にも寡黙にも、正直

者にも嘘つきにもなる。前期旧石器捏造事件が苦く思い出される。

2 考現学の立場から

モノをみるということに関し、考現学採集者である岡本信也氏と対談したことがある。筆者は考古学の立場から、「モノをみる」には三つの段階があると主張した。まず初級、これはただ単にモノの表面を漫然と眺めるだけ。漢字で「見る」。中級、これは観察者がいかに多くの質問をモノに投げかけ、モノからより多くの正しい答を引き出すか。物質文化を研究する者に不可欠な力である。漢字で「観る」。上級、これはあれこれ屈辱でモノに問いかけるのではなく、無我の境地であるがままにモノと対峙し、モノが語りかけてくるのをそのまま受け止める。まるで口寄せをするイタコのような域である。

これに対し岡本氏は、人は分けのわからないものに対し不安感を覚え、何かしら意味付けをし、体系づけたがる。分けのわからないものに名前をつけ、そうすることで安心する。それが分類であり、分類できる人は偉く見え、素人は圧倒される。しかし、それは今の知識での説明に過ぎず、属性分析は真実ではない。例えば、色がきれいというのは誰が決めたか、主観でしかない。

そこで岡本氏は、モノをみる時、主観をそぎ落とし、他人の価値観を排し、その結果、一般化、体系化できたとされるものが怪しく見え、これまでの体系が崩れるという。自己の認識の世界を作ったり、欲望を持つのは構わないし否定しない。しかし、考えれば考える程体系化づけられない。どうモノをみたかを言葉で語ったり絵で表す。結果としてアートになるかもしれないが、アートを狙ってするものではない、と指摘した^{注2}。

会場の聴衆も交え、2時間近くに及んだ対談であったが、両者の話がかみ合わないまま終わった。岡本氏は筆者のモノをみる三段階区分を利用しながら、最終的に無我の上級は初級に戻るとされた。確かに、主観を排し、あるがままにモノをみられればそれに越したことはないが、その域に達する前に、やはり主観たっぷりモノに問いかけ、モノを徹底的に観ることが必要である。属性分析で真実は得られないかもしれないが、限りなく真実に近づいたための事実の積み重ねは、これまた観察からしか得られない。初めは個人の独断と偏見であったとしても、それが普遍化されれば、一步でも二歩でも真実に近づけたことになる。

3 ペットボトルの見え方1 (学芸大)

「はじめに」で述べたように、二つの大学の学生に事前の説明一切抜きで

それぞれ異なるペットボトル（写真1）を見せ、何かしら思うところを書いてもらった。ここでは学芸大学分（写真1-A）を、回答者の言葉づかいをあまり変えることなく、主なものを列記する。

内包的属性

- ・イスラム圏でも日本の緑茶がある。すごく高そうだが日本人向けか。
- ・日本の商品ではないようだが、日本の緑茶が世界的に発売されているのは素晴らしいこと。中国へ行った時に思ったが、海外で売っているお茶は砂糖の入った甘いものがある、日本人の口には合わない。これも砂糖が入っているタイプで、甘口にする理由が疑問。
- ・果糖と書いてあり、Arstraliaで売っていた日本茶にもハチミツや砂糖が入っていて懐かしかった。日本語と英語以外は読めなかったが、絵だけでもお茶と分かるパッケージがデザイン性から見て面白い。
- ・説明などは外国語で書かれていたのに、商品名らしいものは日本語で書いてあった。外国人は日本語に興味があるか。
- ・タイで作られたお茶??緑茶なのに麦の写真?にしても日本語の部分が多い気がする。だが、日本でも紅茶やペプシは英語だから、そういう感覚で日本語を使っているか?



写真1 ペットボトル（左：A、右：B）

- ・何で緑茶なのに麦の絵が書いてあるのか。ひょっとして、タイでは麦茶が緑茶として飲まれているのか。そうだとしたら「緑茶」と書く意味がない。
- ・「おいしい緑茶」と書いてあるのになぜ麦のような絵が!?秋っぽい感じのパッケージのお茶で飲んでみたいとは思ったが、緑茶ならやはり緑!!をメインにした方がお茶っぽい。そして何より麦の絵は間違いだ。ただ、「楽の茶」?の字が蓋付き湯飲みのような中に書いてあったかわいかった。アラビア語のような文字や、英語や色んな文字が混ざっていることから、海外で生産されているとすぐ分かったが、Green tea は日本が一番!!
- ・オレンジの蓋だから温かいお茶だったか。オレンジの蓋=温かい、なぜそう思うのか。麦の絵が書いてあるから多分麦茶。緑茶と書いてあるなら麦の絵はダメ、紛らわしい。よく見たら上の方に緑茶の葉と書いてあった。
- ・緑茶なのに麦の写真がついていてよく分からない。外国の日本茶?「おいしい」と書いてあったが、日本人の自分にはおいしそうには見えなかった。
- ・お茶のペットボトルにローマ字で何か書いてあった。日本語じゃないので分かりにくかった。外国の緑茶だということは分かった。外国で緑茶を生産していることに驚いた。
- ・色んな言語が書いてあって面白い!!でも何が書いてあるかまったく不明。どこの国の製品なのか、ユーザーはどこ国の人なのかも分からない。
- ・いろいろな言語が書いてあり、どこがメインの商品かよく分からなくなってくる。外国語もアラブ系っぽくて見慣れない。
- ・どこのお茶だ!おいしい緑茶の日本語、Green tea は英語、あとよく分からない言語。本当にどこのお茶だろう。電話番号が66 (0) から。味果糖も気になる、というかどんな味か。お茶の名前、漢字が読めない。
- ・珍しいパッケージ。何語?日本のお茶ではなさそう。
- ・おいしいの「い」の字がちっちゃい??日本以外で売られているお茶??
- ・一番目立つところに日本語が書いてあるが、どこのものか分からない。
- ・漢字が読めなかった。緑?どこの言語かまったく分からない。
- ・言葉は確かに違うが、形は似ているし、描いてあったマーク少々違っても雰囲気と一緒に見えた。
- ・どこの国のか分からなかったが、外国の文字で書かれているだけですごい。
- ・日本語も書いてあるし、英語やどこの国の言葉か分からないのがあった。お茶のペットボトルでこんなのは見たことがなく、どこで売っているのか気になった。輸入の缶は見たことあるが、ペットボトルであいったものは見たことないので、初め見た時ビックリした。



写真2 ペットボトル A 正面



写真3 ペットボトル A 右側面



写真4 ペットボトル A 裏面



写真5 ペットボトル A 左側面

- ・どこの国のペットボトルか。成分は知らない文字で書かれているのに、商品名は日本語で、こんなものもあるのだと思った。
- ・日本語と英語は分かったが、他の文字は何語で書かれているか分からなかった。あんなにいろいろな文字で書かれたペットボトルを見たことなかったが、お茶は世界中で飲まれていると思った。
- ・外国で売られているお茶のペットボトルを見た。日本語も普通に書かれていた。日本お茶が世界の人々に飲まれていると思った。
- ・外国のものだと思うが、「緑茶」は日本語で書いてあったので、外国でも「緑茶」という言葉があるのか??日本では緑茶のペットボトルは緑っぽいラベルが多いが、違っていたので少し違和感があった。
- ・初め遠くから見た時は、よくスーパーで売られているペットボトルかと思った。日本でもあのようなパッケージがあった気がする。色的に烏龍茶。
- ・HOT 用、ラベルを剥す切り取り線がない。
- ・色々な国の言語が混ざっていた。アートの様だった。

その他

- ・日本製じゃないのに興味がわいた。
- ・日本の茶は海外に輸出するほど美味しかったことを知った。

筆者は、回答内容を適宜、内包的属性、状況的属性、その他に分類したが、上記のようにほとんどが内包的属性に関するものだった。学芸大の「民族と文化」は、管理栄養学部、メディア造形学部、ヒューマンケア学部の三学部すべてから受講生が集まっている。それぞれ性格のまったく異なる学部ではあるが、今回の回答を見る限り、いずれも物ものそのものに対する興味関心が高く、特に図柄と文字に対して顕著である。今期(2006年度前期)はメディア造形学部生の比率が高かったのも影響しているかもしれない。

4 ペットボトルの見え方2 (外大)

ここでは、外大生の主な回答を列記する。(写真1-B)

一般論

- ・蓋があるので便利。
- ・リサイクルできるものだが、ラベルを取らずに回収へ出したり、中を洗わずに出す人が多い。リサイクルするために自分たちでやることはやる!ということが大切。蓋をすることができる&軽いのでとても便利。
- ・捨てる時、キャップ、ラベル、ボトルに分けるのが面倒。持ち運びに便利。
- ・毎回捨てる場所に悩まされている。学校内にはペットボトル用のゴミ箱が



写真6 ペットボトルB正面

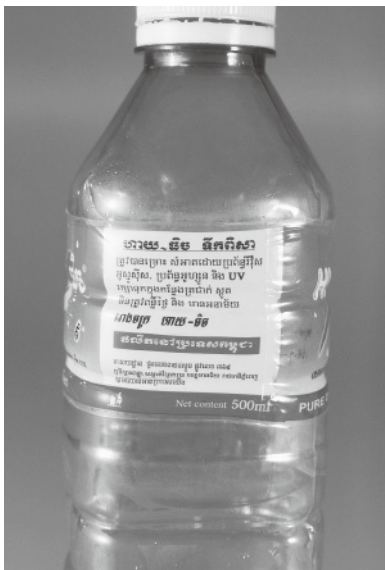


写真7 ペットボトルB右側面



写真8 ペットボトルB裏面



写真9 ペットボトルB左側面

- ないし、捨ててもすごくかさ張ってじゃまに感じる。
- ・プラスチックの入れ物、リサイクル可、地球を大切に。
 - ・現代にはなくてはならないもの。
 - ・ペットボトルのリサイクルは総生産量のどれくらい行われているか。
 - ・生活するにあたり便利。リサイクルもできてよい。大学でも売ってほしい。生活に便利さをもたらした。持ち運びに便利、使用後もただのゴミではなく、いろいろなものにリサイクルでき、人だけでなく地球にも優しい。
 - ・ペットボトルはリサイクルできるのでとても **useful** なもの。
 - ・何回洗っても使えるし、軽くて持ち運びに便利でリサイクルもできるのでいい。水筒よりもれにくくて好き。
 - ・ペットボトルは確かセーターにリサイクル、もしくはフリース。
 - ・ペットボトルは英語で **plastic bottle**。プラスチック製ということは軽くて使いやすいが環境には悪い。最近では時間をかけて土に溶けるものもあるので、一概に「悪い」とは言えない。元々「液体を入れる」容器からビンに変わり、ペットボトルに変わり、一体何がどのように変わってきたか。
 - ・文明の利器、ダイオキシン、タイ産？

内包的属性

- ・ **water** と書いてあり、ミネラルウォーターか。
- ・ 英語とアラビア語 (?) みたいなのが書かれていた。
- ・ 変な文字が書いてあるし、質の悪そうなペットボトルだ。
- ・ 表示が日本語ではなく、書いてあることが理解できない。ペットボトル自体が軟らかい。
- ・ 指で簡単にへこむほど薄い。
- ・ 日本のものと違い、少し頑丈ではない。比較的小さめのペットボトル、リサイクルマークがない。
- ・ 普通のより軟らかくて、捨てる時に潰しやすそう。
- ・ 日本製より弱い構造で、少し小さい気がする。パッケージは、東南アジアかアラビア諸国の言葉。
- ・ 捨てる時に分別するのが面倒だが、軟らかい工夫がしてあると、ちゃんと分別する気になる。
- ・ 日本製ではない。**water** と書いてあったので、水かな。アラビア語らしい字!? で読めない。英語も使ってある。ラベルの **[HI-TACE]** がなんというか気になるーヒタチに見えた。
- ・ 日本と違い水色だった。何が書いてあるかの分らない。

- ・良いボディライン、いいフォルムだ。
- ・これは何？汚れている。

状況的属性

- ・誰かがいたずらで回したのかと思った。ゴミが回ってきたのかと思った。

その他

- ・ペットボトルは誰が発明したか。
- ・見たことのないペットボトル。
- ・変わったペットボトル、どこから来たか。
- ・外国のペットボトル??
- ・何語で書かれているか分からない。もしかしてアラビア語？
- ・いざ出されてどう思うか？といわれると困る。書かれている文字が見たことないものだったので、どこのものか疑問。
- ・どんな飲料が入っているのか興味がわいた。何語で書いてあるか。
- ・英語の他にも変わった言語が書いてあり、どこの国のものか気になった。
- ・最初ラベルの英語を見たのでアメリカ製かと思ったが、回して見るとアラビア語文字のようなもの書かれていたので驚き、どこの国のものか気になった。友達とはタイのものかといっていた。
- ・英語の他に東南アジア系？の言語にビックリ、何と読むか。
- ・一目で日本のものではないと分かった。
- ・このペットボトルは名前負けしないおいしさの様。
- ・このペットボトルは環境に関係がありそうだ。
- ・特に変わったことはない。ポイ捨てしても土になるものか？
- ・何でカンボジアのペットボトルを使うの？
- ・色んな形と種類があるが、それぞれ何の意味があるか。
- ・考古学と何のつながりがあるのかまったく分からない。

先の学芸大と違い、こちらは内包的属性だけでなく、わずか1名ではあるが状況的属性に触れていた。それ以上に、回されたペットボトルから触発されたとは言え、回されたそのものとかけ離れたペットボトル一般論の多さに驚いた。また、書かれた文字そのものに対する疑問の多さは、外国語大学ならではの反応である。

5 筆者の属性分析

二つのペットボトルについて、筆者なりの属性分析を試みる。なお、状況的属性は刻一刻と姿を変え、不変ではない。どの時点のどの状況をとらえる

かであるが、今回こちらから見れば、学芸大、外大で講義中に回したペットボトルであり、学生から見れば、それぞれの大学で講義の初回、何の説明もなく、いきなり教室に回されたペットボトル、となる。

ペットボトル A の内包的属性

まず法量から。蓋まで含めた全体の高さ21.0cm、口金（プラスチック製だが）部を除いた本体の高さ約18.5cm、口径2.6cm、肩部および底部の直径6.7cm、胴部横断面は角切りの六角形を呈し一辺約3.5cm、蓋を含めた総重量は約32g、容量は500ccである。蓋は外径3cm、高さ1.6cm、重さ約2gである。

形状は、蓋付きのペットボトル、口の横断面は正円、口から肩にかけては16面の底辺の長さが異なる細長い二等辺三角形が鋸刃状にかみ合う形で構成され、円錐形に近い多面体である。肩部には一条のやや幅広の凹線が巡り、胴部の横断面は角切り正六角形、胴部から底部への変換点には肩部と同じ凹線が二条廻り、底部は正円で内側に1.1cm程凹んでいる。

素材は、蓋はオレンジ色のプラスチック、口金は白色のプラスチック、本体はペット製で、リサイクル三角矢印の中に1と書かれている。底部中央には、成形された際の湯口の痕跡が径0.4cm程残る。

蓋の上面には、赤色で「美味しい緑茶」の日本語とデザイン化された「味」の一文字、背景には黄色で麦の穂が描かれている。肩部上部にはボトル本体に直接、「EXP 11/12/06 A」改行「CE02.04910 13:50」と黒で印字されている。肩部中程から底部際にかけては、様々な文字や図柄が印刷されたフィルムで覆われている。次に、それらをボトルに向かって、胴部は六面体ではあるが、正面、右側面、裏面、左側面の4方向から見て説明する。

正面（写真2）。上部には、文字の背景に緑や黄緑のお茶の葉が、下部には色づいた麦が描かれており、それらが全周する。文字は上から順に、赤丸の中に白抜きで「味」、「Brand OISHI®」、「Green Tea」、縦書きで小さく「おいしい」、赤地に白抜きで「緑茶」、その下の黄色の逆三角形内の赤い文字？は判読できず、その右にはイラスト化された大きな「緑」の文字と「の」、黒色の蓋付き茶碗に白抜きで「茶」、麦の穂を思わせる絵の右下の文字は生産国の表記と思われるが、筆者は何語か判読できず^{注3}。

向かって右側面（同3）。この面には成分表と思われるものが書かれているが、何語か不明。バーコードの最初の二桁は「88」である。その右側にはゴミ箱へ入れるイラストとリサイクルマークが描かれている。

裏面（同4）。基本的な組合せは正面と同じだが、ブランド名は生産国の表記、麦の穂右下は英語表記に置き換わっている。

向かって左側面（同5）。上部に赤色と黒色を組合せてイラスト化された「味」、その右に縦書きで「果糖」、さらに小さく「おいしい緑茶」と並び、その下には生産国の文字が並び、そして最下段の電話番号の下には英語で、「PRODUCT OF OISHI GROUP PCL : THAILADE」と書かれている。ここまで来て、これが、タイの食品メーカーグループ「OISHI（おいしい）」が製造した商品であることがわかる。

ところでこのお茶の味であるが、多くの学生が違和感を覚えた「緑の茶 Geen Tea」の文字と麦の絵に謎が隠されている。味は麦茶で、しかも裏面の「果糖」の文字が示すように非常に甘い。口にした瞬間、ボトルの表記やイラスト以上に面食らったが、しばらくして昭和30年代の子どもの頃、暑い夏、井戸で冷やした麦茶に砂糖を入れて飲んでいたことを思い出した。

ところで、なぜ中身が甘い麦茶にも関わらず、緑茶の文字が躍っているのか。これは、我々が紅茶といえば英国を、烏龍茶といえば中国を思い起こすように、タイ人にとって日本のお茶イコール緑茶（Green Tea）ではないか。この会社にすれば「緑の茶」は、日本を連想させるお茶の普通名詞であり、「緑茶」そのものではない。品揃えは豊富で、麦茶の他に、カテキン増量タイプやいちご味など、緑茶の名が付された似て非なる数種類のお茶がある。

そもそもこの会社名「OISHI」は日本語由来であり、日本語がブランド力を持っていることを示している。日本でもカタカナ表記や外国語（もどきを含む）表記の会社が多いのと同じである。

また、表記と中身の齟齬について、これまた決してタイのデザイナーを笑うことはできない。日本の商品に用いられた日本語以外の文字や外国風イラストすべてが、その国の文化的な背景まで完全に理解し、当事者にとってまったく違和感を持たせないものであるか否か。アジアは日本に、日本は欧米に片思いの玉突き現象を起こしている。

ペットボトル B の内包的属性

法量は、蓋まで含めた全体の高さ20.3cm、本体の高さ19.9cm、口径2.8cm、口部の厚さ0.1cm、胴部横断面は角丸の四角形を呈し肩部一辺6.0cm、胴部から底面にかけてはややすぼまり底辺5.5cm、蓋を含めた総重量は約18g、本体重量約15g、容量は500ccである。蓋の外径は3.2cm、切り離された高さは1.3cm、重さは約3gである。中身はミネラルウォーターである。

形状は、蓋付きのペットボトル、口金はなく口は本体と一体、口の横断面は正円、口から肩にかけては角丸の四角錐状、胴部横断面は角丸の四角形だが成形の際に生じた歪み？が残り、一部正方形でない部分もある。肩部直下

には浅い凹線が巡り、さらにその下の胴部に7条の凹線が廻る。うち、上から3条目は肩部直下と同じ浅い凹線だが、その他の凹線は幅0.5cm、深さ0.1cmとやや深い。底面には直径3.7cm、深さ0.7cmの椀状の凹みがあり、その中央に成形した際の湯口の痕跡が径0.4cm、高さ0.1cm程でヘソ状に残る。

素材は、蓋は白のプラスチック、本体は青みを帯びたペット製で、非常に作りは薄く、軽く触れるだけで簡単にへこむ。リサイクルマークはない。

商品説明は幅4.2cmのフィルムに印刷され、肩部直下に帯状に巻かれている。正面から順次見ていく。

正面（写真6）。白抜き文字の背景に、青地に白抜きで水滴が表現され、赤と黄色の彗星風の線が描かれている。帯の下端には幅0.5cmの赤い線が巡り、そこにも白抜きで文字が書かれている。筆者は文字が理解できない^{註4}。

向かって右側面（同7）。英語による表記以外の、白地と赤い線に書かれている文字は、正面同様筆者には読めない。ゴミ箱へ入れる絵もある。

裏面（同8）。イラストや文字の配列は正面と同じだが、表記はすべて英語である。上から「HI-TECH®」、「9」、「OSMOSIS, OZONE & UV TREATED」、赤地の帯には白抜きで「PURE DRINKING WATER」と書かれている。

向かって左側面（同9）。ここには右側面と同じ内容が英語表記されている。商品名、効能、生産者、生産国、電話番号、メールアドレスなどである。バーコードの最初の二桁は「88」である。右下に商標らしき記号が見られるが、これは青地の部分にあり、本来は正面に入るべきものと思われる。

6 まとめ

これまでペットボトルを手掛かりに「モノをみるとは何か」を考えてきた。岡本信也氏が述べるように、一切の主観を排し無我の境地でモノと対話できれば最高であろう。しかし、その域に到達するためには、ただ単に観察力を養うだけでなく、人間としても相当の修練を積まなければならない。

物質文化史研究に携わる者としては、まずは加藤晋平氏が提唱した属性分析、内包的属性と状況的属性の観察から第一歩を踏み出したい。徹底した文字による記述と図化作業、これによりモノが語りかけてくる言葉を聞き逃さない感性を磨く。そうすることで、モノが発する情報が見えてくる。まずは主観たっぷりで見ればいい。そして、初めは借り物でいいから、モノに問いかける語彙としての多くの知識を身に付けることが不可欠である。最終的に、多くの経験を積む中で借り物の知識が自分の血や肉になり、知恵となる。自分の主観が普遍化された時、岡本氏のいう無我の境地でモノと対話すること

ができるのではないだろうか。

おわりに

二つの大学の学生のペットボトルの見ての反応は、見事に異なっていた。ただ、今回はそれぞれ別のボトルを見せており、その結果異なる反応だったのか、それとも同じボトルでも同様の異なる反応が見られたか、検討の余地はある。それはともかく、集団としてのまとまりと同時に、個人としての興味関心のあり様が見えてきた。「今時の若い者は…」と決して一くりにしていけないことがよくわかるし、同時にやはり大学、学部が醸し出す共通した雰囲気もある。いずれそれらが学風となっていくのであろう。

この拙文をまとめるにあたり、美濃加茂市文化の森には岡本氏との対談を収録したビデオを見直す便宜をはかって頂きました。また、写場もお借りしました。そして、南山大学人文学部黒沢浩先生には、カンボジアの遺跡調査に参加する機会を与えて頂き、その後もクメール語などについてご教示頂きました。それらなくしてこの文章を書くことはあり得ませんでした。また、調査に参加した日本やカンボジアの学生、関係者の皆さんにも言葉をはじめ大変お世話になりました。記してお礼申し上げます。

注

- 1 加藤晋平「Ⅲ 先土器時代の歴史性と地域性」古島敏雄・和歌森太郎・木村 礎編集『郷土史研究講座 1 郷土史研究と考古学』朝倉書店、東京、1970年、pp58-92。
- 2 2004年8月1日、美濃加茂市民ミュージアム特別展「まちの観察日記」関連事業で『おどろくココロ』と題し、岡本信也氏と筆者が対談を行った。その様子を収録したビデオを元に、氏の発言を適宜筆者の判断で要約した。氏の意図するところと異なる点があれば、その責はすべて筆者にある。
- 3 黒沢浩氏によれば、右側面はクメール語表記、左側面はタイ語表記。そして、このお茶はタイの企業である「OISHI」がタイで生産し、カンボジアへ輸出したものである。
- 4 注3同様黒沢氏によれば、英語以外はすべてクメール語表記。タイ資本の会社「HI-Tech FACTORY」が、カンボジア国内で生産した商品ではないかとのことである。